

新刊紹介

沖積低地の地形環境学

海津正倫 編

古今書院

2012年10月出版

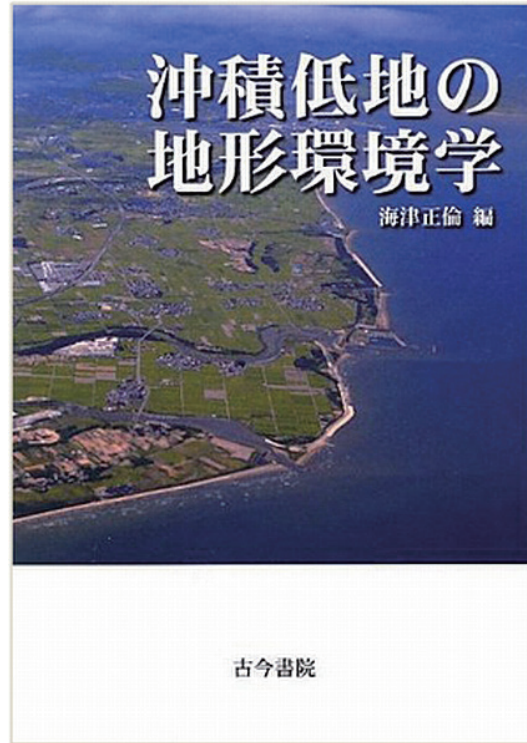
B5判179頁

ISBN: 9784772252638

価格: 4,000円+税

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震により、つくば市近傍の茨城県や千葉県の沖積低地でも大規模な液状化が発生した。その際、液状化の発生した場所が以前の河道跡や干潟を埋め立てた場所に当たるなどのことが注目されたために、沖積低地や沖積層の成り立ちについての理解の重要性が社会的ニーズとして高まりつつある。名古屋大学名誉教授の海津正倫先生は、自然地理学分野において多くの業績がある大家として広く知られている。これまで執筆されてこられた多数の著書の中で、1994年に出版された「沖積低地の古環境学」(272ページ; 古今書院; ISBN4-7722-1838-6) が特によく知られている。この本では海津先生のライフワークであった濃尾平野の浅層地下に広がる木曾川デルタの後氷期発達史研究を中心として、日本国内の沖積低地や沖積層について概説しており、この書物は他に比類するものが無く、その後2000年代に訪れた沖積層研究ブーム時のバイブルとして、出版後20年を経過した今なお引用頻度がすこぶる高い。

その後、奈良大学に転籍された海津先生は「沖積低地の古環境学」の内容を大幅に更新され、沖積層研究の新たなスタンダードとなりえる書籍を編纂され、2012年10月に古今書院から出版された。本書は「沖積低地の地形環境学」と題し、ハードカバー、179ページ、全20章から構成される。第1部(1~8章)と第2部(9~20章)の2部構成となっており、6章と7章の間には、読者の理解を深めるために8ページ分のカラー図版が盛り込まれている。本書の執筆分担者は、海津先生と縁があり現在自然地理学分野の学会の第一線で活躍されている若手~中堅研究者である須貝俊彦氏、堀和明氏、小野映介氏、長澤良太氏、佐藤善輝氏、林奈津子氏、Janjirawuttikul Naruekamo氏らで、それぞれが近年学術雑誌に発表した最新のデータに基づいて各章の執筆を行っている。



第1部では沖積低地に関わる様々な研究が持つ背景について基本的な知識や情報を章ごとにわかりやすく論じており、(1章) 沖積低地を知る、(2章) 沖積低地はどのような場所につくられるか、(3章) 沖積低地を構成する地層はどのようにしてできたか、(4章) 沖積低地の地形の特徴と成り立ち、(5章) 微地形と浅層地質から読み解く地形環境変化、(6章) 沖積低地と水害、(7章) 沖積低地と地震、(8章) 航空機レーザー計測データと沖積低地の地形環境、という構成になっている。

第2部では、沖積低地研究の具体的応用事例を研究テーマに沿って子細に論じており、(9章) 世界のデルタ、(10章) 濃尾平野の形成場、(11章) 濃尾平野の表層堆積物、(12章) 越後平野の地形特性と高精度地形発達史構築への課題、(13章) 矢作川沖積低地における地形環境変遷と遺跡の立地、(14章) 珪藻分析を用いた浜名湖周辺の沖積低地の地形環境復元、(15章) 液状化現象と地形・地質条件との関係、(16章) 海岸平野における地形と津波の挙動、(17章) マレー半島海岸平野の地形発達と酸性土壌、(18章) 衛星リモートセンシングでみる洪水と微地形、という構成になっている。さらに巻末には、(19章) 文献一覧、(20章) 索引が付記されている。

本書は白黒印刷であり、幾つかの図面はカラー図面の転

用のためか、凡例が多くて見づらいものも散見されるが、第2版以降はこの点も改善されることであろう。

冒頭にも述べたように、沖積層研究は人々の生活と密接にかかわっており、2011年3月11日東日本大震災の巨大地震や大津波浸水に伴う沖積低地の各種災害(津波浸水、液状化等の大規模災害、地盤沈下に伴う冠水)、津波浸水による農地の塩害、福島原発の放射能漏れによる土壤汚染、原発敷地内の伏在活断層問題など沖積低地にまつわる話題

は、マスコミに取り上げられることも多い。本書は、自然地理学のみならず、地質学、建設工学、地盤工学、歴史学、考古学などの現場技術者、コンサルタント、学生および研究者を主な対象とし、沖積低地の地形環境について基礎的知識を整理して示し、具体的な研究事例をわかりやすく紹介している教科書といえる。地質学分野の研究者である私からも、多くのGSJ地質ニュース読者に広くお薦めできる一冊である。(産総研 地質情報研究部門 七山 太)